

な人間界の独立をしめす格好の事例である。

コメント

西洋史学専修 前田 徹

興味深い三つの主発表を受けて、古代メソポタミアを対比させたコメントをするようにとのことで、主発表で取り上げられたそれぞれの地域や時代との相違を強調して話したい。

古代メソポタミアと古代エジプトとは、地域は異なっても時間的に平行する。イスラーム世界はメソポタミアとエジプトを覆う形で成立した。古代メソポタミアは地域的にはイスラーム世界に包含されながらも、時間的に前後する関係にある。古代メソポタミアを含む西アジアに対するのが東アジアである。このような時間的・空間的位置関係を考慮しつつ、エジプト、イスラーム、東アジアとの相違点を述べたい。

メソポタミアとエジプト・エジプトと相違するメソポタミアの特徴として、一点だけ、都市国家的伝統を挙げるにとどめたい。古代メソポタミアでは、古代エジプトと相違して、都市は城壁に防備されることで都市の独立性を顕示した。エジプトは前三〇〇〇年にナイル川全域を支配する統一王権が成立したが、メソポタミアでは都市国家分立期が約八五〇年と長く続き、ユーフラテス川流域を支配する統一王権の成立は遅れ、前三三五〇年頃であった。都市の独立

性が統一王権の出現を遅らせた。成立した統一王権も、都市名を冠してアッカド王朝、ウル第三王朝、バビロン第一王朝と呼ばれるように、都市国家的伝統を抜け出せなかった。都市国家的伝統が中央集権への道を阻害したと言える。

メソポタミアとイスラーム・イスラームについても興味深い話を伺えたが、ここでも一点だけ、バグダードの門がユーラシア大陸全域に広がる国際交易路を表示する名を持ち、イスラーム都市が国際色豊かな商業都市の色彩を帯びたということに対してコメントしたい。古代メソポタミアの都市はいわば政治・宗教都市であった。商業都市でもなく、当然、国際的視野から意味づけられる都市ではなかった。地名を冠した門は存在した。たとえば、最高神エンリルの主神殿が立つニップルには「ウルクの門」「ウルに向かい合う門」と命名された門があった。しかしながら、それは、シュメール文明の核となった三大都市ニップル、ウルク、ウルの関係を表示する。門の名称は内向きの意識の発露であり、外に広がる国際的な視点は欠如している。国際商業都市の面ではイスラーム世界と古代メソポタミアとの関係よりも、政治・商業都市クテシフォン・セレウキアやパルミラを造営したヘレニズムやローマ時代との関係が重要であると思われる。古代メソポタミアとイスラーム世界のあいだに、ヘレニズムやローマ時代が設定されることは無視できない。

西アジアと東アジア・遊牧地帯と農耕地帯の接点に都市が生まれるという視点は興味深いが、ここでは、都城制に関して述べたい。

中国の整然とした都城制は、メソポタミアには見られない。メソポタミアの都市は、都市神の神殿域が中心に置かれ、その整備に意を向けるが、居住区は雑然としており、計画的な区画ではない。ギリシャ・ローマ人が各地に建設した都市は都市プランに則り整然としている。土木作業の簡便さを求めた結果かもしれないが、すくなくとも、中国の都城との相関を思い起こさせる。中国の都城制は、王が明白な階層秩序をもってすべてを律して支配することを表現するものと解される。明白で整然とした全体秩序を志向することは、西アジアに共通しないで、逆説的かもしれないが、ギリシア・ローマから西ヨーロッパに流れる思想と通底すると思われる。

日本史学専修 川尻 秋生

妹尾達彦氏に対するコメントと日本の都城制について私見を述べた。

妹尾氏の発表は、これまで氏が積み重ねてきた中国の都城制研究を踏まえ、さらに、その成果を世界的視野にまで及ぼした壮大な内容である。現在、歴史学研究全般にわたって、個別細分化が進んでいる中であって、今回のような研究は、時代や地域を超えて、範とするに足る貴重な研究である。その内容に対して、私がコメントするだけの学識もないが、ここでは、妹尾氏が強調した都城と宗教、とくに仏教との関係について、若干私見を述べておきたい。

平成一八年度早稲田大学史学会大会報告

確かに、中国の都城には、多くの寺院があったが、王権と仏教の関係は、必ずしも良好ではなかった。中国では、南北朝後半から隋唐にかけて、儒教・仏教・道教が王権を巻き込んで、しばしば激しく対立した。これは、中国仏教のなかに、僧尼はシャカの方に仕え、俗権力には服従しないとの考えがあったことに起因している（川尻秋生「寺院と知識」『列島の古代史三 社会集団と政治組織』岩波書店、二〇〇五年）。したがって、こうした中国仏教の存在形態から考えて、仏教の宇宙観が都城にどのように反映したのかという問題は、そう単純ではないように思われる。また、中国の都城には、寺院とならんで道観がある。これが都城制とどのような関係にあったのかという点も今後の検討課題であろう。

後半では、日本の都城の若干の問題点を指摘した。最近、飛鳥地域の都城について考古学的な調査がなされるようになった。その結果、多くの事象が解明されてきたのだが、とくに、飛鳥岡本宮（舒明）・飛鳥板蓋宮（皇極）・後飛鳥岡本宮（斉明）・飛鳥浄御原宮（天武）がほぼ同一場所に造営されたことが明らかになった点は大きな収穫であろう。ところが、飛鳥浄御原宮は、母である斉明大王が造営した後飛鳥岡本宮に修造を加え、その東南に宮（東南廊・エビノコ廊）を新たに造営したのみで、新たな宮都を造営しなかった。母の宮があったといっても、そもそも、利用面積が限られる明日香川に近いこの地に、なぜ宮を営んだのかも説明がつきにくい。

周知のように、天武天皇は、大友皇子との皇位争いである壬申の